

# 「読書」が、気になる

## 学研教育総研レポート

学研教育総合研究所 川田 夏子

10月末から11月上旬にある読書週間。この時期になると「読書」に関するニュースが目に入ってきて、とても気になる。読書週間を中心に、書店や出版社、公共図書館、各種メディアで読書や書籍にまつわるキャンペーンやイベントなどが行われる。読書離れが進んでいるといわれている中、子どもたちはどのような読書をしているのだろうか。

今回は、子どもの読書についてのさまざまなデータを見てみようと思う。

### ◆本当に読書をしなくなったの？

まずは、私たち学研教育総合研究所の2022年小学生白書での調査を振り返ってみる(資料1)。1～6年生の月の平均読書量(冊数)は2.8冊で、2021年調査時の3.1冊から減少、調査以来過去最低を更新した。「1冊も読まない」割合は31.6%で、ここからは増加している。

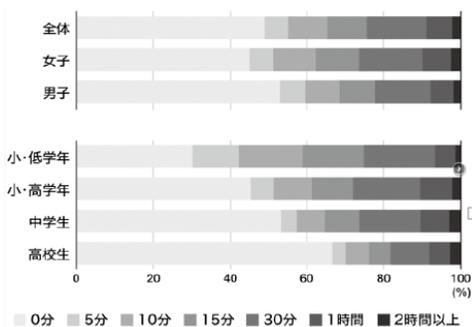
では、本を読んでいる時間はどうか。ベネッセ教育総合研究所の2022年度調査(資料2)によると、小学生の1日の読書時間は、低学年の平均では15分から30分の割

資料1 1か月にどれくらい本を読みますか

		(%)						
		10冊以上	5~9冊	3~4冊	2冊	1冊	読まない	平均(冊)
全体		10.8	8.0	19.2	14.2	16.3	31.6	2.8
性別	男子	10.2	5.7	16.8	12.7	17.0	37.7	2.4
	女子	11.3	10.3	21.5	15.7	15.7	25.5	3.1
学年別	小学1年生	13.0	10.0	24.5	15.0	14.0	23.5	3.3
	小学2年生	13.0	9.0	15.5	15.5	14.5	32.5	2.9
	小学3年生	11.5	9.0	18.5	15.5	12.5	33.0	2.9
	小学4年生	11.5	6.5	20.5	10.0	18.0	33.5	2.7
	小学5年生	9.0	8.0	19.5	14.5	18.0	31.0	2.6
	小学6年生	6.5	5.5	16.5	14.5	21.0	36.0	2.1

学研教育総合研究所 小学生白書2022

資料2 1日の読書時間

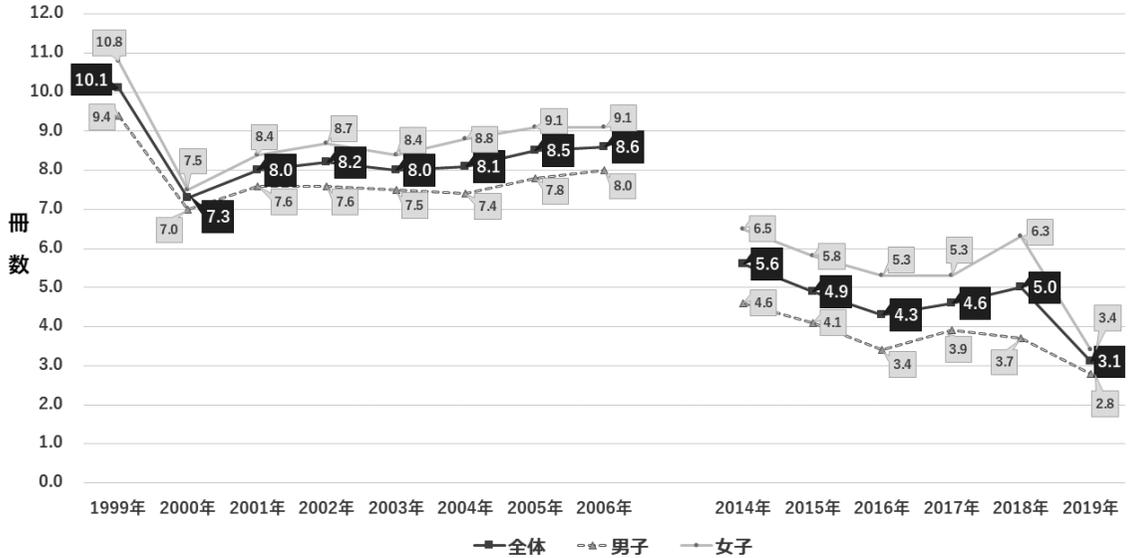


小学生から高校生の読書に関する7年間の追跡調査データ  
ベネッセ教育総合研究所

合が多く、高学年になると1時間〜2時間以上という層の割合が多くなっている。個人差はあるものの、発達段階の中で、じっくり本を読むことができるようになってくることが見てとれる。一方で、高学年の約45%が1日の読書時間は0分と回答しており、低学年に比べて約1.5倍。学年が上がるにつれて、本を読まない層が増えていることは間違いないようだ。課外活動や習いごと、塾などに費やす時間に、ゲーム、スマホ使用時間も加わり、読書時間を確保することが難しくなるのだろう。

そんな中で注目したいのは、1日1時間以上読書をする層である。この層は小学校高学年〜中学生にかけてはそれほど読書時間の減少は見られない。一定程度「本好き」と呼ばれる子どもたちが存在しているのは頼も

資料3 1か月の読書量（冊数）1999～2019年



学研教育総合研究所  
小学生白書30年史(1989年～2019年)

い。ただし、冊数を見ると、「10冊以上読む」は、小学校1年生で13・0%なのが、6年生では6・5%と半減している。高学年になれば読む本のページ数が増えていくので、1冊を読み切るのに時間をかけているということか。（資料1）。「本をよく読む層」と「まったく読まない層」の二極化が進んでいるように見える今、「読書の質」についても知りたいところである。

### ◆読書好きな子どもたち？

学研教育総研の30年にわたるデータでも、経年で見ていくと2006年調査から2014年調査の間にブランクがあり、ここで読書量がぐんと減ったことがわかる（資料3）。

実は、2006年までの調査は学研の「科学」「学習」の読者アン

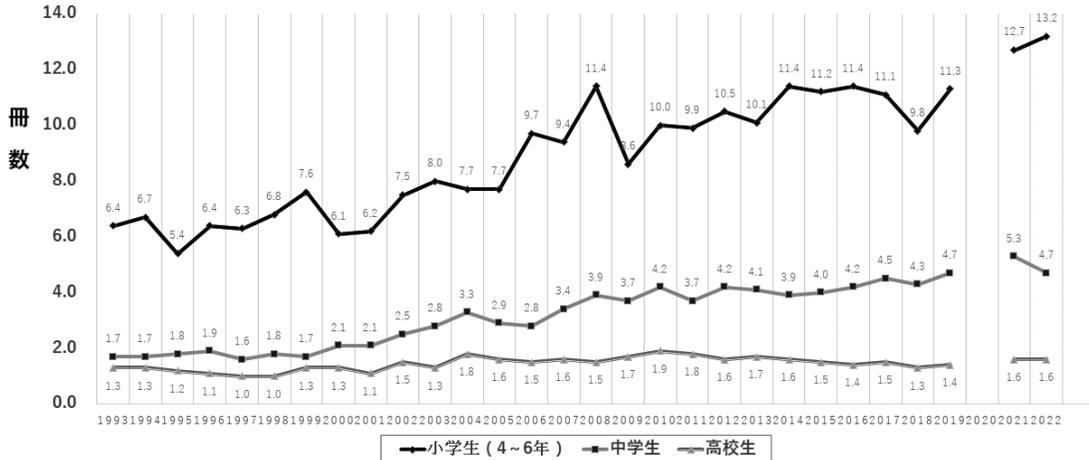
ケートによって行われていた。その後、調査対象を人口比での全国無作為抽出として実施したところ、2014年以降のような推移をたどった。毎月のように学習誌などを購読している子どもたちは、文字を読むことに慣れ、何かを調べたり、その過程で比較的文章を讀んだりすることへのハードルが低くなっていたのかもしれない。小学生新聞を読んでいる子どもたちに好きなことのアンケート調査を行うと、第1位は必ず「読書」があがってくるそうだが（朝日小学生新聞調べ）。それが10年連続だという。「読書」という比較的シンプルと思われる調査でも対象者や、その環境によって結果はいろいろと違ってくる。「全国平均」という指標も大切だが、これからの多様性の時代の中では、調査結果の分析を細かに見ていく必要を感じている。

### ◆これからの読書って？

ところで、全国学校図書館協議会による「学校読書調査2022」（資料4）はこれまでの傾向とかなり違っており、メディアで話題になった。4～6年生の5月ひと月の平均読書量（冊数）は上昇傾向にあったのだ。

異なる調査とはいえ、なぜこんなにも違う結果になるのだろうか。実はこの調査では、1か月に読んだ冊数と同時に、その中で電子書籍の読書状況についても聞いていた。私たちは「読書」をまだ紙の本と想定して調査していたきらいがある。しかし、電子書籍を讀

資料4 5月1か月間の平均読書冊数の推移

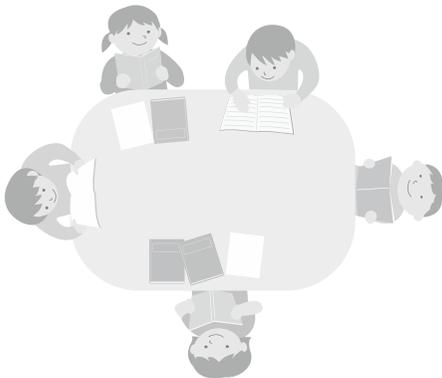


第67回学校読書調査(2022年 公益社団法人 全国学校図書館協議会)をもとに学研教育総合研究所で作成



んだことがあると答えた回答者に、「紙の本とスマホやタブレットなどを比べ」と、どちらが読みやすいか」と聞いたところ、「紙の本」と答えたのは、小学生45・6%、中学生40・4%、高校生45・0%だったという。物語などを読んで、前のページに戻って確認したりするためには、紙の本のほうが扱いやすいのかもしれない。だが、確実にデジタルで本を読む子どもたちも増えているのだ。

紙の本のほうが読みやすいと答えた児童生徒のほうが多い一方で、「スマホやタブレットのほうが読みやすい」と答えた児童生徒も小・中・高ともに30%以上おり、子どもたちが今後どのメディアを使って読書をするのか、



我々は意識していかなければいけないと感じている。この調査は小学校4年生以上であるが、現在の小学校1年生はすでにGIGAスクール構想のもと、一人1台端末の環境で入学している。音楽をCDといったカタマリで購入し聴いていた時代から好きな曲を1曲ずつ選んで聴くようになったことと同じように、読書状況を調査するときも「1冊」という単位・カタマリではなく「1話」単位から質問する、ということを考える必要があるかもしれない。子どもたちの読書も、必要なセテンズから選んで読んでいくような読み方が増えていく可能性もあるだろう。

読書に費やす時間もカタマリではなく、すき間、細切れ時間を賢く使っていくようになるかもしれない。